

# 九州大学 大学文書館ニュース

第39号

2015.11.30

## 目 次

自らの文書を自ら保存する意味：東京大学文書館の取り組み	2
大森治豊の旧蔵書	4
九州大学大学文書館委員会名簿	8

九州大学大学文書館・九州大学百年史編集室名簿	8
大学文書館日誌抄録	8
百年史編集室日誌抄録	12



「大森治豊銅像（病院地区）」（2010年6月）

本学の病院地区にある大森治豊像である。大森は内臓外科の權威で、京都帝国大学福岡医科大学の初代学長兼附属医院長を務めた。1879（明治12）年10月、東京大学医学部を卒業、同年、同僚の熊谷玄旦（内科）とともに福岡県立医学校の教師として福岡に着任した。以後、福岡県立医学校長、県立福岡病院長を歴任、上述のように1903（明治36）年4月には新設の福岡医科大学長となった。その銅像は、1910（明治43）年5月、後進子弟らの関係者によって寿像として建立されたが、太平洋戦争中の1943（昭和18）年6月、金属供出により構内からその姿を消した。戦後は台座のみとなっていたが、医学部五十周年に当たる1953（昭和28）年5月、まず胸像として再建され、その後、医学部七十周年の1973（昭和48）年11月、現在の像が造られた。この像は初めは旧医学部事務棟前に建てられていたが、庭園計画や新病院建築計画により現在地に移設された。本学では唯一の全身像（立像）である。

# 自らの文書を自ら保存する意味：東京大学文書館の取り組み

森 本 祥 子

## 1 はじめに

東京大学文書館は、1974年に設置された東京大学百年史編集室、1987年に年史編纂終了に伴い設置された東京大学大学史史料室の成果を引き継ぎ、2014年4月に設置された。大学史研究に軸足を置いていた従来の機能から、大学の歴史的に重要な法人文書の保存を担うアーカイブズへの移行を目指して設置されたものである。

そして、2015年4月付で国立公文書館等としての指定を受け、ようやく大学の法人文書保存体制を発足させた。公文書等の管理に関する法律（公文書管理法）施行からすでに4年が経つながらの出発だが、当館なりに国立公文書館等指定を目指す中で考えたことを少し紹介したい。

## 2 東京大学文書館について

東京大学文書館は、総長室総括委員会下に位置づけられている。ここには領域横断的なプロジェクトや総長の強いリーダーシップの下で全学として推進すべき重要プロジェクトが配置されることになっており、そうした位置づけでスタートできたことは、大学のアーカイブズとしては望ましいことだといえる。

スタッフは、館長・副館長・准教授・特任助教各1名、アシスタント・アーキビスト（教務補佐員）3名、事務補佐員1名である。現在、特任助教をもう1名公募中であり、採用が決まれば教員3名体制にできる。九州大学大学文書館の体制には及ばないものの、一般的にみれば恵まれた体制といえることは自覚しているが、以下に触れるように当館は2館体制を取っていることもあり、この体制でもとても手が回らないというのが現実である。

館の組織は、大学史部門、法人文書部門、デジタルアーカイブ部門、の3部門に分かれている。といっても職員は厳密に3部門に所属を分けているのではなく、業務がまだ確立していない現在は、全員で知恵と労働力を出し合いながら全業務に当たっている状況である。しかし各部門の業務をより高度に推進するためには、いずれできるだけ早く担当を決め、責任感を持って業務に当たる

必要がある。

当館の特徴としては、2館体制を取っていることが挙げられる。本郷キャンパスに本館、柏キャンパスに分館を置き、いずれも同じ機能を持たせている。すなわち、それぞれに資料を収蔵し、その資料を閲覧提供する機能を持つ。閲覧者は資料収蔵先の館で資料を利用してもらうこととし、当館の資料目録には、どちらの館に資料があるかを記載している。

もともと2館体制は積極的に望んだものではなく、スペースを求めて柏キャンパスに分館を得たものである。2館運営は人手が分散されるという意味でも、往来に手間がかかるという意味でも、決して楽ではない。しかし、柏キャンパスにネットワークを築く足がかりができたというのはメリットもある。2館体制という、他ではあまり例のない取り組みをいかに積極的に活かしていくか、当館にとっての課題である。

## 3 国立公文書館等の指定を受けるという選択

### 3.1 東京大学としての基本的考え方

公文書管理法下の制度では、国の機関は歴史的に重要な文書の保存先として、国立公文書館または自ら設置するその同等の施設である国立公文書館等の、いずれかを選択できる。その二つの選択肢から、東京大学文書館は自ら国立公文書館等となることを選んだ。公文書管理法成立以前から大学の文書館として機能している九州大学大学文書館には当たり前だと笑われそうだが、当館なりに考えたことをここでまとめておきたい。

東京大学百年史編集室は、早い段階から大学アーカイブズに注目していた。海外の大学アーカイブズの調査を行い、東京大学もそれが必要だという確信を持っていたと言ってよい。実際、年史編纂事業が終了して大学史史料室に移行した時、同時に保存年限を満了した文書が史料室に移管されるよう、文書管理規則も改定したようなのである（所蔵資料の現状を見ると、残念ながら文書の定期的な移管が実現した形跡は見られないのが）。そして公文書管理法が施行された以上は、大学としてのアーカイブズ整備は、すなわち国立

公文書館等としての指定を受ける体制を整えることを意味する。

このように、いわば自明のこととして指定申請を考えていたのだが、申請準備を進める中で制度を具体的にイメージできるようになるに従い、改めて大学は独自に文書館を持たなければならぬ、という思いを強くした。

### 3.2 自ら文書館を持つ必要性

大学が自ら文書館を持つ必要性について、まず、ごく現実的な点から言うと、同じ大学内に文書館が存在するということの持つ物理的・心理的なハードルの低さが挙げられる。

組織アーカイブズの重要な役割は親組織の運営に資することであり、アーカイブズは親組織にとって使いやすいものであることは、非常に重要である。以前移管した文書について確認したいことがあったとき、同じキャンパス内で気軽に連絡をとって資料を確認できる環境と、国立公文書館に出かけて一利用者として文書を探す環境と、どちらが親組織にとって使い勝手がよいかは、明らかであろう。

日本の組織では、文書を手元に置いておく習慣が強い。当初設定した保存期間が満了しても、保存期間を延長して保有し続けている文書は少なくない。こうした習慣から、文書の文書館への移管がなかなか進まない傾向にあるが、移管先が外部機関となれば、その使い勝手への不安から、なおさら手元に置いておきたいという意識が強くなってしまわないだろうか。

次に、より本質的な、大学という組織の性質に由来する理由がある。組織アーカイブズは組織活動を記録する役割を持つのだが、そのあり方が行政機関と大学とでは実は大きく異なる。大学でいえば、行政機関の文書に該当するのは、大学の本部や各部局の事務組織の文書といえる。組織の最高意思決定をする評議会／役員会や教授会の記録、人事や財務の文書、これらは確かに組織を直接運営するにあたって作成される文書であって、中央省庁と同じだろう。

しかし大学はそもそも教育・研究を行う機関であり、その幅広い活動はこうした組織運営文書だけでは捉えきれない。組織活動の記録を保存するのがアーカイブズであるので、理論上は大学で発生するすべての情報・記録は文書館の保存対象となるが、もちろん現実にはそのようなことは起こらない。例えば、理系の巨大実験装置や博物資料



本郷本館外観

はそもそも文書館での保存活用は無理である。しかし他方で、これらの研究活動に伴って発生する文書資料や情報は、文書館が保存を担ってもよいだろう。また、文書館は資料保存機関としては後発であり、すでに図書館や各学部・研究室などでそれぞれの資料保存機能を確立しているところが少くない。このように、多種多様な資料・情報が学内各所で発生する大学という組織では、組織運営文書だけを切り離して保存しても意味がないのである。むしろ、学内に文書館を置き、拡散しがちな学内の情報資源（資料そのものではない）を集約する役割を担うことが必要だと言える。こうした役割を担うには、文書館が学内の資料保存ネットワークの一員でなければならない。

制度上、大学が独自に文書館を持つ必要性について、もう1点考えたことがある。それは、公文書管理法体制では、どの文書を残すかという判断は原則として文書作成側が行い、それに文書館が助言をするという作りになっている点である。つまり、もしも移管先が国立公文書館であれば、学内各文書管理担当者とやりとりをするのは、国立公文書館となる。そのような体制の場合、東京大学の個性がきちんと残せるだろうかということが懸念される。

よく言われることだが、文書作成者が重要だと考える文書と、アーカイブズの視点から重要だと考える文書は、必ずしも一致しない。また、部署毎の判断基準も多様である。このとき、大学文書館であれば、東京大学という総体を前提としてどの文書が必要かということを考えられ、文書作成者と調整しながら保存対象文書を選択するという、きめ細かな対応を取ることができる。しかし、各部署の文書作成者と国立公文書館ではあま

りに距離があり、両者の見解をすりあわせるのは容易ではないはずである。

公文書管理法のシステムでは、事実上文書館がレコード・マネジャーの役割も担っているといえるが、そうだとしてそれが外部にあっては十分機能しないと懸念される。大学の姿を俯瞰して、過不足なく保存すべき文書を選びとるには、自らの文書館が必要ではないだろうか。

#### 4 おわりに

国立公文書館等の指定を受けるにあたっては、設備面での要求を満たすことの大変さがよく指摘されるが、筆者はそのこと以上に、情報公開制度に匹敵するまったく新たな制度を作らなければならないことのほうが難易度が高いと感じた。これ

は、アーカイブズ機能の構築と国立公文書館等としての制度整備を、同時に進めたことからくる問題だったかもしれない。

しかし、くじけそうになりながらも、制度の理解が少しづつ進むに従い、かえって独自の文書館がなければ東京大学の歴史が残せないという思いが強くなっていた。それが準備を進める上でモチベーションとなった。

夢に描いているようなスムーズな文書の移管と整理・公開は、まだ当分実現しないだろう。しかしとにもかくにも、それに向けた一歩を踏み出せた。これからは夢の体制構築に向けて、少しづつ進んでいきたい。

(東京大学文書館准教授)

## 大森治豊の旧蔵書

山根泰志

### 1. 大森治豊と九州大学

大森治豊（1852～1912）は、福岡医学校校長、県立福岡病院長、京都帝国大学福岡医科大学初代学長兼附属医院長を歴任し、九州大学の基礎を築いた学祖の一人であり、1885（明治18）年、全身麻酔と最新技術の防腐法を駆使した、日本で最初の近代的帝王切開手術に成功し、日本の腹部外科の開拓者として知られる<sup>1)</sup>。九州大学には、病院キャンパスに「大森通り」、「大森治豊先生像」<sup>2)</sup>、箱崎キャンパスの大学文書館に「大森治豊関係資料」<sup>3)</sup>（2003年寄贈）等、大森に縁のあるもののが存在するが、図書館に大森の旧蔵書が存在することは、これまで知られていなかった。



図1 大森治豊  
(1898年ドイツ滞在中)



図2 大森治豊先生像  
(1973年小田部泰久制作)

### 2. 大森治豊旧蔵書概要

官制の改正により九州帝国大学附属図書館が設置されたのは、1922年（大正11）5月29日である（初代館長は小川政修）。当時の附属図書館は、1925年に竣工した箱崎の附属図書館本館に事務が移転するまで、医学部構内の図書閲覧室（1908年竣工）において事務が行われていた。図書閲覧室時代に受入れた図書・雑誌の情報（受入日・備品番号・書名・冊数・金額・納入（寄贈）者等）を記載した『九州帝国大学図書原簿』が中央図書館に残っている。それに記載された大森治豊旧蔵書の受入日・数量等は、下記の通りである。

受入日：1922年10月13日

寄贈者：大森丙氏（治豊養子、通信省通信技師）  
和書29部208冊 備品番号：1119-1147  
洋書126部405冊 備品番号：852-997  
計155部 613冊

受入日が附属図書館設置直後であること、当時の図書閲覧室の蔵書が貧弱であったこと、大森が築いた外科学教室ではなく附属図書館に寄贈されたことから、附属図書館の蔵書の基盤とすることが目的の一つであったことが推定される<sup>4)</sup>。

岩熊哲「杏仁医館隨筆（その十七）」（『九大医報』11-4、1937）によれば、大森の蔵書は全て大学に寄贈

されたとあるが、155部613冊という数量は、読者家として知られた<sup>5)</sup> 大森の全蔵書としてはやや少ないという印象を受ける。大森の旧蔵書の全体像を把握する上で、大学文書館の「大森治豊関係資料」に収蔵されている大森の蔵書目録『Bücherverzeichnis der Bibliothek von Prof.Dr.H.Omori』が参考となる。洋書（特にドイツ語図書）を中心とする目録で、下記のように分類されているが、やはり外科学の図書が多いことがわかる。

- I Anatomie (解剖) 9部9冊
- II Pathologische Anatomie (病理解剖)  
10部12冊
- III Physiologie (生理) 2部2冊
- IV Chirurgie (外科) 78部152冊
- V Gemischt[e] Mediz[inische] Bücher (医学雑書) 29部58冊
- VI Varia (雑) 6部6冊
- VII Medizinalwesen, Medizinalkalender,  
Berichte, Krankenhäuser &c (医療制度、医療便覧、報告、病院等) 34部45冊
- VIII Zeitschriften (雑誌) 19部 (冊数未記載)
- IX Wörterbücher (辞書) 14部52冊

図書は182部336冊<sup>6)</sup>、雑誌は19部であり、九州大学への寄贈図書と書名が一致するものが多いが、一致しないものもある。また、下記の3点は、九州大学への寄贈図書が大森旧蔵書の全てではないことを示唆している。

- ・医学図書館における調査（後述）で発見された外科学教室教授の三宅速（1867～1945）の旧蔵書（全体の数量、受入日等は不明）に、大森治豊の蔵書印が捺された『Compendium der speciellen Chirurgie』が見出され、大森の蔵書の一部が三宅に引き継がれた可能性がある。
- ・附属図書館が1932年に市内古書店の明文堂より購入した古書に、大森の蔵書印が捺された臼井浅夫編『福岡県地誌略』（明治11年刊、中央図書館所蔵）が含まれており、大森の蔵書の一部が古書市場に流出していた可能性がある。
- ・大森は和漢洋を問わず、歴史、経書、小説、教育、勧業の論なく手に触れた書を片端から読んだといわれるが、寄贈された図書は医学書以外の図書が少ない。

### 3. 現状調査

平成26年度の九州大学附属図書館研究開発室「コンテンツ形成に関する調査研究」（担当室員：ミヒエル・ウォルフガング氏）の活動とし

て、大森治豊旧蔵書の調査と整理を行った。その結果、医学図書館に30部245冊、中央図書館に19部26冊、計49部271冊確認された。詳細は下記の通りである。

#### ○医学図書館所蔵

##### A. 明治期の医学書を中心とする和装本

確認された数量：12部28冊

所在：貴重図書室

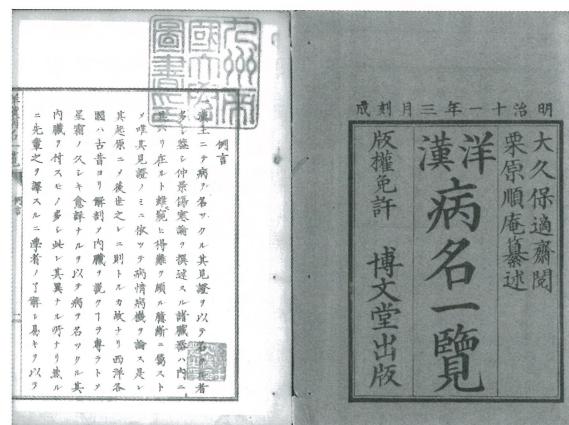


図3 『洋漢病名一覽』明治11年刊

##### B. 明治期医学雑誌

確認された数量：5部81冊

所在：3階保存書庫

##### C. 医学書を中心とする洋図書・雑誌

確認された数量：13部136冊

所在：貴重図書室

医学図書館では相部久美子閲覧係員、梶原瑠衣参考調査係員を中心に調査・整理が進められ、本稿もその成果に拠るところが大きい。なお、この調査の過程で、医学図書館に眠っていた貴重な資料が数多く発見され、その成果の一部は『九州大学附属図書館研究開発室年報』2014/2015（2015）において報告されている。

#### ○中央図書館所蔵

##### D. 保管転換図書

確認された数量：12部15冊

所在：1階書庫・保存書庫旧分類洋書書架

洋書の一部は1927（昭和2）年5月30日・1929年11月26日に、他の図書閲覧室にあった図書とともに、附属図書館本館に保管転換（新たな備品番号

が付与される)されており、それが通常の図書と同様の分類を付与されて混排されている。1927年移管分は、『和獨對訳字林』『William Shakespeare's sämmtliche Werke』等、医学書以外が中心であり、1929年移管分は医学書中心である。

#### E. 未整理洋書

確認された数量：7部11冊

所在：1階保存書庫（書架番号58）

この書架には図書閲覧室時代の図書・雑誌をも含む大量の未整理資料が雜然と置かれており、その中には、青島歯獲書籍（1923年2月寄贈）・バルト文庫（1924年3月購入）・廣瀬文庫（1925年12月寄託、戦後購入）・福岡地方裁判所旧蔵本（1928年3月保管転換）・長田三郎旧蔵本（1934年3月購入）・近藤文庫（1934年11月購入）等のまとまって入ってきた文庫類の受入漏れと思われる図書が発見されており、大森治豊旧蔵書もその一つである。法文学部及び附属図書館の創設期にあたり、第一次大戦後のマルクの暴落もあって、膨大な図書が購入されたため、整理が追い付いていなかった状況を反映するものであろう<sup>8)</sup>。

以上の調査の結果、大森治豊旧蔵書は、附属図書館の事務が医学部構内の図書閲覧室から箱崎に竣工した附属図書館本館に移転したことに伴い、医学部構内に残されたものと、箱崎に移転したものとに分散していることが確認された。創設期の他のコレクションと同様、分類、排架上で別置されておらず<sup>9)</sup>、文庫扱いもされていなかった。「寄贈/大正拾一年十月十三日 大森丙」という寄贈印と寄贈者名の表記はあるものの、大森の蔵書印（図4：「醫學士大森治豊之印」「大森藏書」（方印・円印2種）「大森」「Dr. H. Omori / Tokio (Japan)」）は押印されているものが少なく、個々の図書を見ても大森治豊の旧蔵書とは気づきにくいため、その存在は早い段階で忘れ去られたと思われる。



図4 寄贈印と大森治豊の蔵書印

#### 4. 今後の課題と将来的活用

大森治豊旧蔵書は、医学図書館・中央図書館に分散しており、その存在は埋もれ、忘れ去られている。未確認・未整理資料も多く、現在進行中のキャンパス移転に伴い大森治豊旧蔵書と分からず廃棄される可能性もある。大森治豊は九州大学の学祖の一人であり、その学史上の存在の大きさから言っても、適切に整理・保管する必要がある。

最終的には一箇所に集約し、「大森治豊文庫」として別置することが望ましいが、排架場所等の問題があり、当面は目録データがないものにはデータ登録、データ登録済みのものには文庫名「大森治豊文庫」の入力を進めており、附属図書館の蔵書検索システムにより抽出できるようにしている。また、図書現物にも一目でわかるように「大森治豊文庫」の小ラベルを貼付している。

大森と同時代に医学の道を進んだ森鷗外（1862～1922）の旧蔵書からなる東京大学附属図書館の鷗外文庫は、通常の図書と同じ分類を付与され、長い間館内の書架に混排されていたが、2005年から開始された「鷗外文庫プロジェクト」によって、文庫の別置や目録データベースおよび書入本画像データベースの作成等を実現した<sup>10)</sup>。その結果、鷗外文庫の全容の把握が可能となり、その存在感も価値も益々大きくなりつつある。現在までの調査で大森の蔵書には、鷗外の蔵書と重なる部分が多いことが判明しているが、全国各地に眠っている日本の近代医学創設期の医学者の旧蔵書の整理・データベース化が進めば、同時代の医学者の蔵書を比較・分析することも可能となる。

また、九州大学の淵源の一つである福岡医学校（1879～1888）は、資料が乏しく不明なことが多いが、大森の蔵書の中には福岡医学校で教科書として使用していたものが含まれている可能性がある。太宰府市公文書館中川家文書や、九州歴史資料館宮川文書には、福岡医学校時代の大森の受講生による講義ノートが残っているが、それらとの比較・分析により、福岡医学校でどのような教育が行われていたかなどを明らかにする資料となり得ることが期待される。

大森治豊という、不世出の医学者の見識<sup>11)</sup>によって蒐集された蔵書は、その独創性の源を伝えてくれるだけではなく、日本の近代医学が、西洋の近代医学を受容しつつ、どのように生まれ、普及していくのかを探る、大きな手がかりを与えてくれるだろう。

[附記] 本稿の執筆にあたっては、附属図書館の皆様のほか、下記の皆様に大変お世話になった。記して御礼申し上げる次第である。

折田悦郎氏（九州大学大学文書館）  
上山市立図書館  
九州歴史資料館  
佐藤裕氏（国東市民病院）  
ミヒエル・ウォルフガング氏（附属図書館研究開発室特別研究員）  
(以上五十音順)

[注]

- 1) 大森治豊については、宇留野勝彌編『医傑大森先生の生涯』(1961)に詳しい。その他、『福岡医学校関係物故者追弔会記事』(古賀得四郎、1933)、岩熊哲「杏仁医館隨筆(その十一、十四、十七)」、九大医史の試み(上、中、下)」(『九大医報』10-4、11-1、11-4、1936~1937)、杉江勇「九州開眼秘史(南蛮医術)」(『夕刊フクニチ新聞』1964年4月21日~6月23日)、天児民和「続医学史の横路、大森治豊先生をしのびて」(『九大医報』38-1、1968)、佐藤裕「福岡医科大学創設者・大森治豊」(『日本医史学雑誌』48-3、2002)、小林晶「杏林之栄」からみた九大創立前後」(『九州大学大学史料室ニュース』23、2004)、土居善胤編、佐藤裕・光富彰対談「九州大学医学のきらめく博士たち」(博多に強くなろうシリーズ79、西日本シティ銀行、2011)等がある。
- 2) 生井浩「大森治豊先生の銅像建立の経過報告」(『学土録』9、1974)、後小路雅弘「大森治豊先生像」(『九州大学百年の宝物』、丸善プラネット、2011)を参照。
- 3) 折田悦郎「大森治豊と大森関係史料の寄贈について」(『九大広報』30、2003)、同「大森治豊関係資料」(前掲『九州大学百年の宝物』)を参照。
- 4) 『九州帝国大学図書原簿』によれば、当時の図書閲覧室の蔵書数は約2000部5800冊で、九州帝国大学開学(1911年)後10年以上経過していることを踏まえれば貧弱の觀を免れず、まとまった寄贈と言えば、1916年に帝国図書館から移管された図書(276冊)程度であった。当時、眼科教室をはじめとして、医学部・工学部の各教室が、膨大な図書を蒐集していたように、図書蒐集・管理の中心は図書閲覧室よりも各教室であった。大渕貴之、山根泰志「九州大学所蔵狩野亨吉関係図書について」(『中国文学論集』40、2011)を参照。
- 5) 初代及び現在の「大森治豊先生像」の左手に医書を持っていること(図2を参照)にも示唆されるように、大森は寸暇を惜しんで読書するこ
- とで知られ、常に書物をはなさず、当時福岡の人は人力車上で読書している人影を見れば大森先生に間違いないとの定評があった。
- 6) ただし、冊数未記載の図書は1冊として算出しているので、正確な数ではない。
- 7) 前述の1885年に行われた近代的帝王切開手術の記事を掲載した『東京医事新誌』403号、『中外医事新報』139号も含まれている(佐藤裕氏のご教示による)。
- 8) 志村惠「青島歯獲書籍について—現在の所蔵を中心に—」(『金沢大学文学部論集』言語・文学篇、27、2007)、梶嶋政司「九州帝国大学法文学部草創期の文庫形成と在外研究員」(『九州文化史研究所紀要』56、2013)を参照。なお、久留米市に設置された九州大学第三分校(1949-1951)に、附属図書館本館及び各学部から重複図書が移管され、閉校後に返却されたが、この書架には「第三分校返却分」といった貼り紙があることから、この未整理資料群は、第三分校から返却された図書の一部と図書館ではみなされていたようである。確かに、中央図書館保存書庫に残る第三分校の『借用図書目録』によれば、米軍の教本である「War Department education manual」シリーズや戦中に設置されて戦後廃止された附属工業専門部(1945-1949)の旧蔵本など、受入手続きが完了していない図書を第三分校に大量に貸し出しており、その他の未整理資料も貸し出していた可能性はあるが、図書現物に痕跡が見出せない(第三分校では未登録図書には請求記号ラベル等の装備を施さなかった)こと、第三分校閉校後の時代に寄贈された未整理図書も確認できることから、この書架の全ての未整理資料が第三分校に貸し出されていたとみなすことはできない。
- 9) 深谷「忘れられた文庫たち—中央図書館所蔵幕末明治期漢学者旧蔵書群—」(『九州大学附属図書館研究開発室年報』2008/2009、2008)を参照。
- 10) 江川和子「鷗外文庫書入本データベースの公開について」(『文学』8-2、2007)、河野至恩「東京大学附属図書館「鷗外文庫プロジェクト」について」(『日本近代文学』77、2007)、『鷗外の書斎から一生誕150年記念森鷗外旧蔵書展—』(東京大学附属図書館、2012)を参照。
- 11) 旭憲吉(1874~1930)が1906年に皮膚科教授として着任した際、皮膚科では研究上一日も欠くことの出来ない垂涎の珍本であった『ヘブラ氏皮膚病図譜』(Atlas der Hautkrankheiten)が大学にあることを大森より聞いて驚き、早速探して皮膚科教室の図書室に収めた。大森が1882~1883年頃に購入したとのことで、当時日本全国に皮膚科学が独立していない時に、この分野

に目を向けていた大森の見識を旭は褒め称えて  
いる。前掲宇留野勝彌編『医傑大森先生の生涯』

を参照。

(九州大学附属図書館事務部図書館企画課企画係)

### 九州大学大学文書館委員会名簿

委員長	副学長	宮本 一夫	委 員	芸工院 教授	Remijn Gerard
委 員	基 幹 教 授	新谷 恭明	〃	シ 情 院 教 授	荒木啓二郎
〃	文 書 館 教 授	折田 悅郎	〃	シ 情 院 教 授	瀧本 英二
〃	人 文 院 教 授	佐伯 弘次	〃	応 力 研 准教授	千手 智晴
〃	人 文 院 准教授	岩崎 義則	〃	韓 七 教 授	松原 孝俊
〃	人 文 院 准教授	山口 輝臣	〃	図 書 館 部 長	益森 治巳
〃	比 文 院 教 授	中野 等	〃	博 物 館 館 長	吉田茂二郎
〃	法 院 教 授	熊野 直樹	〃	理 学 部 等 事 務 長	臼杵 純一
〃	言 文 院 准教授	岡本 太助	〃	総 務 部 部 長	根本 幸枝
〃	薬 院 准教授	宮本 智文	〃	総務部総務課 課 長	邊田 憲

(2015年10月1日現在)

### 九州大学大学文書館・九州大学百年史編集室名簿

館 長	副学長	宮本 一夫	総務課長（法令審議室長）	邊田 憲
副館長	基 幹 教 授	新谷 恭明	事務職員	名切 光子
専任教員	文 書 館 教 授	折田 悅郎	事務補佐員	川畑 由美
兼任教員	人 文 院 教 授	佐伯 弘次	〃	中村 江里
〃	人 文 院 准教授	山口 輝臣	百年史専任教員 准教授	藤岡健太郎
〃	比 文 院 教 授	中野 等	〃 助 教	井上美香子
〃	法 院 教 授	熊野 直樹	〃	市原 猛志
〃	シ 情 院 教 授	荒木啓二郎	〃	官田 光史
研究協力員	名譽教授	東定 宣昌	百年史テクニカル・スタッフ	徳安 祐子
〃	〃	植田 信廣	〃	加藤 純子
〃	〃	柴田 篤	百年史事務補佐員	中村 和泉
〃	福岡市博物館館長	有馬 學	〃	田籠 亜起
〃	長崎大学名譽教授	柴多 一雄		
〃	西日本新聞社論説委員	大西 尚人		

(2015年10月1日現在)

### 大学文書館日誌抄録（2014年7月～2015年8月）

7.24 (木)	九州産業大学工学部教授、資料調査 のため来館（10月20日も同様）。	8.5 (火)	大学院システム情報科学研究院より 資料受領。
7.28 (月)	全国歴史資料保存利用機関連絡協 議会第40回全国大会準備委員会開 催（折田悦郎教授出席。於大学文 書館）。	8.7 (木)	九州大学医学歴史館建設実行委員 会事務局より資料調査のため来館 (9月19日、10月21日、11月5日、 7日、12月11日、26日、2月10日、 3月23日、26日も同様)。
8.1 (金)	福岡教育大学名譽教授、資料調査の ため来館（7日も同様）。	8.8 (金)	九州共立大学事務局長、大学文書館

	視察のため来館。	
8.19 (火)	九州大学男声合唱団コールアカデミーより資料寄贈。	(依頼)」(九大總三第5号。以下、「一斉回収について(依頼)」と省略)を通知。
	長崎大学名誉教授、資料調査のため来館(10月23日、11月4日も同様)。	川本芳昭副学長、大学文書館長退任。
	総務部総務課と法人文書移管についての打ち合わせ(10月17日、12月9日、1月23日も同様)。	宮本一夫副学長、大学文書館長に就任。
8.23 (土)	大学史研究会事務局より大学文書館視察のため来館。	企画部企画課より資料受領。
8.25 (月)	西日本新聞社記者、取材のため来館(米軍機墜落関係資料の件。9月9日も同様)。	塩川郁夫氏(元本学技官)より資料寄贈(4月2日も同様)。
8.27 (水)	台湾大学生命科学学院副教授、資料調査のため来館。 留学生センター講師、資料調査のため来館(28日、29日、9月1日、2日、8日、9日も同様)。	兵庫県川辺郡猪名川町教育委員会より資料調査のため来館。
9.2 (火)	総合研究博物館より資料調査・大学文書館視察のため来館(10日、11日、12月16日、1月19日、23日、2月5日、3月20日も同様)。	「九州大学の歴史」(基幹教育総合科目)開講(折田教授)。
9.8 (月)	松本龍元環境大臣、文書館視察のため来館。	甲寅会(工学部同窓会)会長等来館、資料寄贈。
9.9 (火)	「新亭亭舎」着工記念式典開催(折田教授出席)。	西日本新聞社記者、取材のため来館(箱崎キャンパス模型の件)。
9.10 (水)	西日本新聞社記者、取材のため来館(戦前期九大関係新聞スクラップ帳の件)。	平成26年度ホームカミングデー開催(「九州大学箱崎地区模型・旧六本松地区模型」(大学文書館所蔵)展示、折田教授解説・案内)。
9.11 (木)	NHK福岡放送局記者、取材のため来館(「九大紛争」関係資料の件)。	総合研究博物館・附属図書館と共に「音楽の夕べ」を開催(~11月16日。於中央図書館、医学図書館、伊都図書館、芸術工学図書館)。
9.18 (木)	元九大生協専務理事、資料調査のため来館(19日、22日、24日、10月20日、30日、11月6日、10日、13日、17日、20日、12月4日、15日、18日、1月22日、26日、29日、2月9日、12日、16日、19日、3月2日、5日、9日、12日、16日、19日、23日、4月16日、17日、20日、27日、5月11日、14日、25日、6月15日、18日、22日、25日、29日、7月2日、13日、16日も同様)。	附属図書館(中央図書館)より資料受領(新聞スクラップ。3月5日も同様)。
9.19 (金)	北九州イノベーションギャラリー(KIGS)より山川健次郎関係資料貸借のため来館。	内閣府より大学文書館査察のため来館(折田教授、総務部総務課応対)。
9.24 (水)	「平成25年度までに保存期間が満了した法人文書の一斉回収について」	工学部土木工学科卒業生一同、大学文書館視察のため来館。
		学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻より大学文書館視察のため来館。
		中国新聞社より本学戦後学生運動の件につき照会、回答。
		全国歴史資料保存利用機関連絡協議会第40回全国大会開催(~14日。於大学文書館等。宮本館長、総会開会「ご挨拶」)。
		折田教授、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会自由論題研究会において「九州大学における大学アーカイブズの歴史・現状・課題」を講演(於旧工学部本館)。
		特定歴史公文書「施設部移管図面」

	(計167点) を修復・複製物作成ため業者に委託 (3月17日完了)。	学文書館視察のため来館。
1.21 (金)	文学部・附属図書館と共に「九大1968—林崎介男の写真で振り返るー」を開催 (~2月19日。於中央図書館3階回廊)。 九州大学医学歴史館建設実行委員会展示・IT部会開催 (折田教授出席。1月6日、2月2日も同様)。	基幹教育院教育実践部教授、大学文書館視察のため来館。
1.29 (土)	大学史研究会第37回大会開催 (~30日。於大学文書館等)。折田教授、井上美香子助教 (大学文書館百年史編集室)、各々、シンポジウム「大学の存在意義を問うー大学と地域社会との関係からー」の commenter、司会を担当。	西日本新聞社より旧制福岡高等学校卒業生の件につき照会、回答。
1.30 (日)	『九州大学大学文書館ニュース』 第38号刊行。	「一斉回収について (依頼)」文書にもとづき、附属図書館事務部より資料受領。
12.1 (月)	法学部より所蔵資料 (奥田八二文庫) 受領 (~4日)。	朝日新聞社記者、取材のため来館 (箱崎キャンパスの歴史の件)。
12.2 (火)	「一斉回収について (依頼)」文書にもとづき、理学部等事務部より資料受領。 東京大学大学院教育学研究科准教授、資料調査のため来館 (1月6日も同様)。	大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻と共に古賀崇天理大学人間学部総合教育研究センター准教授の講演会「アーカイブズのこれからを展望するー電子記録、映像、記憶を中心にー」を開催 (於旧工学部五号館大講義室)。
12.8 (月)	朝日新聞社記者、取材のため来館 (米軍機墜落関係資料の件。12日も同様)。	文学部・附属図書館と共にトークイベント「九大1968—撮影者林崎介男氏を囲んでー」を開催 (於中央図書館4階視聴覚ホール)。林崎介男氏、柴田篤大学院人文科学研究院教授、折田教授)。
12.10 (水)	「5年目評価・10年以内組織見直し」制度のヒアリング開催 (宮本館長、折田教授出席)。	朝日新聞社記者、取材のため来館 (学徒出陣関係資料の件)。
12.11 (木)	福岡県立大学副学長、大学文書館視察のため来館。	鳥取県教育委員会より資料調査のため来館。
12.22 (月)	西日本新聞社記者、取材のため来館 (「九大紛争」関係資料の件。1月16日も同様)。 財務部資産活用課より資料受領 (24日も同様)。	折田教授、福岡共同公文書館にて「大学と「地域」—九州大学の歴史を中心にー」を講演。
12.24 (水)	山口大学農学部教授、資料調査のため来館。	「一斉回収について (依頼)」文書にもとづき、九州大学病院事務部より資料受領。
12.25 (木)	大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻より大学文書館見学のため来館。	東京学芸大学副学長・教育学部教授等、大学文書館視察のため来館。
1.5 (月)	大道学館出版部より資料調査のため来館 (2月18日も同様)。	第23回大学文書館委員会開催。
1.19 (月)	福岡共同公文書館館長・副館長、大	岡崎篤名誉教授 (理学部) より資料寄贈。
		「九州大学学内共同教育研究センター規則」制定 (4月1日施行)。 「九州大学大学文書館規則」廃止)。
		学務部学務企画課より資料受領。
		大学院人文科学研究院柴田篤教授より資料寄贈。
		「一斉回収について (依頼)」文書にもとづき、貝塚地区事務部より資料受領 (~5日まで)。

3.4 (水)	折田教授・藤岡健太郎准教授、資料調査のため旧農学部附属台湾演習林、台湾師範大学、台湾大学医学人文博物館を訪問（～6日）。 九州大学出版会より資料調査のため来館。 国立歴史民俗博物館歴史研究部教授、資料調査のため来館。	有馬學名誉教授・福岡市博物館長 柴多一雄長崎大学名誉教授 大西尚人西日本新聞社論説委員 調査員（～2017.3.31） 中村俊郎氏 桂木勝彦氏 中村江里氏、事務補佐員就任。	
3.9 (月)	有川節夫前総長、大学文書館視察のため来館。	水崎雄文氏（文学部卒業生）来館、資料寄贈。	
3.10 (火)	東京外国语大学文書館より大学文書館視察のため来館。	西日本新聞社記者、取材のため来館（「九大紛争」の件）。 横浜市立大学大学院都市社会文化研究科客員研究員、資料調査のため来館。	
3.11 (水)	熊本大学60年史編纂室より大学文書館視察のため来館。	4.2 (木)	九州大学医学歴史館開館式開催（宮本館長、折田教授出席）。
3.13 (金)	米軍機墜落・旧大型計算機センター工事の件につき、元本学工学部技官へのヒアリング調査実施（折田教授。於大学文書館）。	4.3 (金)	F B S 福岡放送記者、取材のため来館（九大病院の歴史の件）。
3.16 (月)	愛知大学東亜同文書院大学記念センターより大学文書館視察のため来館。	4.4 (土)	椎木講堂展示運営委員会開催（折田教授出席。27日も同様）。
3.18 (水)	久保千春総長、大学文書館視察のため来館。 防衛大学校人文社会科学群教授、大学文書館視察のため来館。 旧制福岡高等学校同窓会（青陵会）より来館、資料寄贈。	4.13 (月)	「文書記録活動論」（大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻）開講（折田教授）。
3.19 (木)	総務部基金事業課より資料受領（20日も同様）。 熊本大学大学院社会文化科学研究科教授、大学文書館視察のため来館。 農学部附属演習林より大学文書館視察のため来館。	4.14 (火)	平成28年度概算要求ヒアリング開催（宮本館長、折田教授出席）。
3.23 (月)	大学院工学研究院上野照剛特任教授より資料寄贈。	4.15 (水)	「大学とはなにか—とともに考える—」（基幹教育総合科目）開講（藤岡准教授）。
3.27 (金)	朝日新聞社記者、取材のため来館（学徒出陣関係資料の件。5月12日、22日も同様）。	4.20 (月)	新採用職員研修の一環として、折田教授「九大の歴史に触れる」を講義（於カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所ホール）。
3.31 (火)	『九州大学大学史料叢書』第21輯刊行。 山本尚史氏、事務補佐員退任。	4.22 (水)	第24回大学文書館委員会開催。
4.1 (水)	大学文書館協力研究員、同調査員を委嘱。 協力研究員（～2017.3.31）。 東定宣昌名誉教授 植田信廣名誉教授 柴田篤名誉教授	4.27 (月)	西日本新聞記者、資料調査のため来館（30日、5月1日、7日、8日、11日、12日、14日、25日、6月10日、18日、22日、26日、29日、7月13日、29日も同様）。
		4.28 (火)	統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻授業（PTL II）のため、受講生来館。
		5.8 (金)	鷹部屋莊平氏より、資料寄贈。
		5.11 (月)	福岡市博物館館長・学芸課学芸員、大学文書館視察のため来館。 中島弘吉氏（経済学部卒業生）来館、資料寄託。
			平成27年度「本学記念日」式典開催

	(「九大百年展」「九州大学箱崎地区模型・旧六本松地区模型」展示、折田教授解説・説明)。	近代建築物の評価報告書に基づく取り扱い検討委員会開催(折田教授出席。7月9日、8月3日、9月3日、10月26日も同様)。
5.12(火)	中国新聞社より本学戦後学生運動の件につき照会、回答。	甲南女子大学附属図書館より資料調査のため来館。
	FBS福岡放送より創立記念日の件につき照会、回答。	旧制福岡高等学校同窓会青陵会より資料寄贈。
5.13(水)	西日本新聞社より創立記念日の件につき照会、回答。	NHK福岡放送局より取材のため来館(「九州大学新聞」の件)。
5.14(木)	「伊都キャンパスを科学するⅠ」(基幹教育総合科目)の一環として、折田教授「九州大学史と伊都キャンパス」を講義。	新任係長・専門職員級研修の一環として、折田教授「九大の歴史と資料について」を講義(於伊都キャンパスゲストハウス多目的ホール)。
	奥田八二元福岡県知事・名誉教授ご遺族より資料寄贈(8月19日も同様)。	伊藤昌司名誉教授(法学部)来館、資料寄贈。
5.21(木)	「一斉回収について(依頼)」文書にもとづき、工学部等事務部、監査室より資料受領。	NHK福岡放送局記者、取材のため来館(大学文書館所蔵「旧工学部採鉱学科実習報告書」の件)。
6.3(水)	西日本新聞社より初代総長の件につき照会、回答。	新任主任級研修の一環として、折田教授「九大の歴史を学ぶ」を講義(於伊都キャンパスゲストハウス多目的ホール)。
6.4(木)	中村江里事務補佐員、資料調査のため熊本市歴史文書資料室に出張(～5日)。	理学部物理学科事務室より資料受領。
6.9(火)	「九州大学箱崎キャンパスにおける	

### 百年史編集室日誌抄録(2014年8月～2015年8月)

8.31(日)	部局史編Ⅰ公開開始。	5.1(金)	中村和泉氏(事務補佐員)着任。
9.9(火)	事務局部局史編打合せ。	6.1(月)	百年史編集室を推進室化。
9.24(水)	第13回百年史編集小委員会開催。	6.19(金)	第12回百年史編集委員会開催。
3.31(火)	清原和之氏(テクニカルスタッフ)・境良恵氏(事務補佐員)退任。	7.1(水)	官田光史氏(助教)、市原猛志氏(助教)着任。
4.1(水)	加藤絢子氏(テクニカルスタッフ)着任。	8.3(月)	田籠亜起氏(事務補佐員)着任。
		8.31(月)	資料編Ⅱ公開開始。